



# 京都市学校歴史 博物館だより

VOL.

9

平成16年10月発行



## 企画展 「昭和30・40年代の子どもの暮らしと教育」

～あの頃は、お父さんもお母さんもみんな子どもでした～

今回の企画展では、時代とともに変化する子どもの暮らしや教育について、特に我が国が高度成長期を迎え、衣・食・住ともに大きく変貌を遂げた昭和30・40年代に焦点を当て、当時の京都市立学校の教育や学校生活、家庭での様子を様々な資料で紹介しました。

現在の教育や暮らしを考える契機になればと思い開催した企画展ですが、展示期間中に夏休みが含まれたこともあり、たくさんの親子・三世代の方々に御来館いただきました。今回の企画展が、それぞれの時代の違いや共通点等を語り合い、認識し合う良い機会にさせていただけたのではないかと思います。

今後とも、京都市学校歴史博物館では、教育の歴史的意義を多彩な展示で紹介してまいります。

### 企画展の概要

開催期間 平成16年7月17日(土)～10月12日(火)

展示構成 1 昭和30・40年代の国語の教科書と児童文学  
・国語教科書・絵本原画・ガラス絵ほか

2 昭和30・40年代の学校と暮らし

- ・教科書・教具・日常生活用品・学校給食献立サンプルほか
- ・体験コーナー

3 昭和30・40年代生まれの少年少女漫画雑誌

展示点数 約200点(展示替え含む)



## 自由課題研究「昔の学校を調べよう！」

小学生を対象とする夏休みの教室。学校歴史博物館所蔵の資料や展示物をもとに昔の小学校について調べました。京都市小学校社会科教育研究会の先生方からテーマの選び方・見学の視点・まとめ方の助言を受けて、子ども達はそれぞれ自分で選んだテーマについてわかったこと、思ったことをプリントに書き込みまとめました。展示室の見学では、子ども達が昔の教科書を熱心に見入っていたり、先生や主事、市民学芸員に質問したりしている様子があちこちで見られ、昔の学校についていっそう興味を持ちだしたようでした。この教室のあと、子どもたちは自分の力ですばらしい自由研究にまとめあげたことでしょう。



## 古文書を読む(入門編)

成人で初心者の方を対象に、園田学園女子大学助教授五島邦治先生の指導により、京都の町に残された古文書の中から、町の仕組みや生活の様子がわかる史料を教材にし、古文書の基礎と当時の社会背景について学ぶ講座です。第一回は、「京都旧記録」の冒頭が取り上げられました。くずし字の読みだけでなく、句読点を打って意味が通じるように読み、わが町の記録をどのように残そうとしたかを考えました。



## 教科書の部屋より

## 「表紙からみる教科書～図画・唱歌～」

今回は、図画と唱歌に焦点を当て、表紙の変遷をたどってみました。昔と現在では教育内容が違っており、その内容の違いは表紙の違いにも現れています。

初めの図画教科書は、そこに描かれている手本を写しとることがなによりも重要でした。描くべきモチーフも決められており、西洋の絵画教育を模倣としていました。その後、欧化政策への批判が盛んになり、内容も鉛筆画だけのものから毛筆画を取り入れたものになってきます。京都では、日本で最初の小学校用毛筆画手本を出版しています。

明治37年に発行された第一期国定教科書は、それまで洋装右開きの形だったものを左開きの形にしています。そのため表紙の文字も従来の右から左だった方向が左から右へと読む現在と同じ体裁になりました。大正時代はお手本を写し取るだけの臨画教育を見直し、児童中心の思想にたつ自由画教育論が盛んになりました。

現在の「図画工作」は子どもたちの自由な自己表現を中心にしており、参考として児童生徒の作品を載せています。表紙も児童生徒の作品を使った表紙へと変わっています。

唱歌の教科書に載っていたのは、初めは雅楽や賛美歌をもとに作られた歌がほとんどでした。その後、明治後

期の教科書には、わらべうたや民謡など一般の人にも愛されている歌が取り上げられるようになりました。

大正期には、四季の代表的な歌や童謡を取り上げたり、読本から題材をとったりしています。昭和16年、これまで「唱歌」であった科目は「音楽」と名称が変わります。この時期に発行された国定教科書「ウタノホン上」「うたのほん下」は初めて色刷りの教科書となり、イラストを用いた明るく楽しい表紙へと変わっています。

戦後、暫定教科書を経て現在のようイラストや写真をふんだんに取り入れた表紙になってきました。

(事業課業務係 和田 純子)



## 昔の学校あれこれ

## 第三回

## 給食

太平洋戦争前、京都市内で学校給食を行っていた地域もありましたが、京都市の小学校での給食は戦後の昭和22年に、ミルクとおかずだけの副食給食として始まりました。昭和29年に「学校給食法」が公布・施行され、教育活動としての給食になっていきます。当初はミルクは生牛乳ではなく脱脂粉乳で、おかずは大根、にんじん、缶詰の肉が入った味噌汁でした。パンが加わりパン、ミルク、おかずの完全給食になったのは昭和25年からです。昭和45年には全面的に脱脂粉乳が生牛乳に変わり、おかずも一品から二品へと増えました。そして昭和53年から米飯給食も始まりました。最近の献立は「きつね丼」「ソース焼きそば」「ピビンパ」「肉だんごのスープ」など多様で充実したものになっています。

写真は昭和46年、清水小学校での給食風景です。



## 企画展

## 「昭和30・40年代の子どもの暮らしと教育」展について

竹村 佳子

今回の企画展では、展示室が3部屋に分かれていることもあり、3部構成とし、様々な角度から昭和30・40年代を見ていただけるようにしました。

第1部「昭和30・40年代の国語の教科書と児童文学」では、国語教科書によく取り上げられている、動物文学の第一人者である椋鳩十と、ファンタジー童話の草分けであった宮沢賢治の作品が、昭和30・40年代に、どのように教科書に扱われたかを展示し、大阪府立国際児童文学館所蔵の梶山俊夫の絵本原画椋鳩十原作「におい山脈」、同「お日さまのうた」と、泉啓一のガラス絵「賢治曼荼羅」をあわせて展示させていただきました。

昔の国語教科書は、編集者が国語教育をするために教科書用に書いた文章とおとぎ話で構成されていました。坪内逍遙が執筆した明治期の検定教科書、その後の国定教科書はもとより、昭和30年前後の検定教科書でも、川端康成や山本有三が筆をふるっていました。それが、次第に、著者として名を運っていない児童文学作家の作品が取り上げられるようになりました。主に京都で、昭和30・40年代に採択された国語教科書の内容表を作成し比較してみると、明らかに昭和40年代になって既存の児童文学作品の掲載が増えています。



上記の事実を背景として、椋鳩十の「月の輪グマ」が載った昭和35年の教育出版「標準国語 4年上」と、昭和46年の「母ぐま子ぐま」が載った光村図書「小学新国語 5年下」を比べてみますと、前者には作者名の記載はなく、本文は書き換えが多いのに比べ、後者は、作者名が記載され、原文に忠実です。また、昭和46年の光村図書「小学新国語 4年上」の「椋鳩十を読んで」には、それまでなかった読書案内や読書感想文の作品例が載っています。「大造じいさんとガン」は、昭和39年東京書籍「新編 新しい国語 5年上」にあります。大切な前書きやクワイマックスの一部が省略され、現在の教科書に載っているものと異なっています。

一方、宮沢賢治の作品と教科書との関係は、戦後の文部省が作製した国定教科書に「どんぐりと山猫」が掲載されたことに始まりますが、作者名の記載はなく、方言は標準語に書き換えられていました。しかし、昭和46年の光村図書「小学新国語6年上」に取り上げられた「やまなし」は、作者の表記と原作に忠実で、この作品は、挿絵も含めて現在でも使われています。また、昭和45年東京書籍「新訂 新しい国語 5年下」では、宮沢賢治の伝記を扱っています。

昭和40年代から盛んになった既存児童文学作品を尊重する傾向は、新進の作家の作品採用にもつながり、以後、児童文学作品の読書案内へと広がっています。

第2部「昭和30・40年代の学校と教育」では、京都市立学校に残っていた当時の教具や校具と、安寧自治連合会が子どもの学習のために地域から集められ、保管されていた生活用品類を出品していただきました。

昭和30・40年代に、子ども時代を過ごした私は、展示品の選別をするにあたり、自分の学校生活や家庭での暮らしの記憶を思い出そうとしましたが、30年以上も前のことだけに、容易に思い出せません。しかし、当時使った文房具や生活用品などを実際に見てみると、当時の場面や考えていた事柄が、ジワジワと甦ってきます。袖をまくり、たらいの前にかがんで、洗濯板の上で洗濯物をゴシゴシやっていた母が、洗濯機を購入



したのは、私がら5歳位の時でした。洗濯機だけでなく、冷蔵庫も、炊飯器も、掃除機も、ミシンも、電化され便利になっていきました。久しぶりに蚊帳を見ますと、両ひざを前に揃えて、さっと入るコツを身に付けた当時の私が現れます。今年のアテネオリンピックでは、日本選手のメダル獲得ラッシュが連日、新聞の一面を飾りましたが、金メダル獲得数は、昭和39年の東京オリンピックと同数といえます。新幹線や高速道路が開通し、敗戦後の日本の復興が、世界に認められたこの年のオリンピックを、観戦するためにカラーテレビが普及しました。流行に乗れなかった我が家では長い間テレビの画面は白黒で、友達とテレビ番組の話をするのが嫌でした。忘れてしまっていた子ども時代の情景を思い出すと、急激に変化した日本の社会に改めて驚きます。昭和30・40年代は、大衆の日常生活が、最も変化した時代というべきでしょう。

少年少女漫画雑誌類も主なものがこの時期に創刊しました。第3部では「昭和30・40年代生まれの少年少女漫画雑誌」と題して、私たちの年代が夢になった漫画雑誌を並べ、各プロダクションにご協力頂いて、原画の複製も展示いたしました。当時の漫画雑誌からは、多くの人気テレビアニメが生まれ、テレビ子が増えました。また、雑誌には、連載漫画だけでなく、妖怪や未来のロボットについての、子どもの最も興味ある読み物が掲載され、ライオンの子やニシキヘビを賞品にするといった、今では考えられないような懸賞を付けたものもありました。

「昭和」が終わって早くも15年が過ぎました。普段見たり使ったりしてきた何気ない物を集積し、展示することで、この時代の様々な記憶が観覧者個々に甦り、この変化を知らない世代に、自らの記憶を話して聞かせてもらえるのではないかと。今回の展示では、このことを第一のねらいとしました。

(京都市学校歴史博物館 学芸員)

# 特別展 「陶芸家からのおくりもの」 ～京都市立学校所蔵の陶磁器～

**開催期間** 平成16年10月16日(土)～  
平成17年1月18日(火)

**展示趣旨** 京都は、近世から続く窯業の歴史をもち、数多くの名工を生み出しました。これらの名工の作品をはじめとして、京都市立学校には、学区の人々や陶芸家から寄贈された多くの陶磁器が伝わっています。今回の特別展では、京都市立学校所蔵の陶磁器の名品を一堂に集め、京都のやきもののすばらしさを再認識していただくとともに、陶芸家の学校に寄せる想いなどを紹介します。なお、親子三代にわたって京都市立六原小学校を卒業した故清水卯一氏(今年2月に逝去)の特別コーナーを設けます。

**主な陶芸家名** 河井寛次郎・北大路魯山人・六代清水六兵衛・楠部彌弼・近藤悠三・宮下善寿・森野嘉光・今井政之・新聞寛山 ほか

(順不同)

**特別展に関する講演会**

(1) 清水保孝氏(日本工芸会理事)講演会

テーマ 「父・清水卯一と六原小学校の思い出」

日時 平成16年10月24日(日)

午後1時30分～3時

場所 京都市学校歴史博物館 講義室

(2) 伊東徹夫氏(京都市立芸術大学教授)講演会

テーマ 「京都市立学校所蔵の名品・陶磁器の見どころ」

日時 平成16年11月28日(日)

午後1時30分～3時30分

場所 京都市学校歴史博物館 講義室

※講演会はどちらも事前申込制  
(詳細は京都市学校歴史博物館  
までお問い合わせください)



清水卯一「蓮葉掛分圓壺 大地山河」  
六原小学校蔵

## 事業のご案内

### 特別対談「平安京の歴史と文学」を語る

**日時** 平成16年11月21日(日) 午後2時～3時30分

**場所** 京都市学校歴史博物館 講堂

**内容** 上田正昭当館館長と中西進京都市立芸術大学長が「平安京の歴史と文学」をテーマに対談します。

**定員** 250名

**参加費** 無料

**申込方法** 電話申込(先着順)

**申込先** 京都市学校歴史博物館(TEL 075-344-1305)



## 京都市学校歴史博物館

京都市下京区御幸町逢原寺下る植町437(元開智小学校)  
TEL 075-344-1305 FAX 075-344-1327 〒600-8044

- 入館料/大人200円 子ども(小・中・高)100円  
(20名以上の団体/大人160円 子ども80円)  
※京都市内の小・中学生は土・日は無料
- 開館時間/9:00～17:00(入館は16:30まで)
- 休館日/水曜日(休日の場合は翌日)  
12月28日～1月4日



ひと・まち・ロマン 元気都市・京都

**交通 ACCESS**

- 阪急電車/「河原町」駅下車 南西へ歩5分
- 地下鉄/烏丸線「四条」駅下車 南口改札東へ歩10分
- 市バス/「四条河原町」駅下車 河原町通より西へ二丁目(御幸町通)より南へ歩5分